

令和3年度第10回 感染症発生動向調査部会
議事要旨

1 日 時 令和4年1月19日(水) 14:00～

2 場 所 岐阜大学医学部本館 1階 小会議室(岐阜市柳戸1-1)

3 出席者

委 員 : 馬場 尚志(岐阜大学医学部附属病院 生体支援センター センター長)
大西 秀典(岐阜大学大学院医学系研究科 小児科学 教授)
澤田 明(岐阜大学医学部附属病院 眼科 臨床准教授)
加藤 達雄(国立病院機構長良医療センター 呼吸器内科統括診療部長)
石山 俊次(石山泌尿器科皮膚科)
オブザーバー: 小山 静代(岐阜市保健所 感染症対策課 感染症対策係長)
事務局 : 石塚 敏幸(感染症対策推進課 感染症対策第二係長)
今尾 幸穂(保健環境研究所 疫学情報部長)
岡 隆史(保健環境研究所 主任専門研究員)

4 議 題 (進行:馬場委員)

- (1) 前月の感染症発生動向について
- (2) 検討すべき課題について
- (3) その他(感染症対策推進課から)

5 議事要旨

【前月の感染症発生動向について】

- ・事務局からの説明は資料のとおり。
- ・月番委員のコメントについては資料のとおり。

【検討すべき課題について】

○梅毒・性感染症の動向に関する背景要因について(継続)

- ・他の疾病と比べ顕著な変化があり、他県の状況も含めて動向に注目すべきと考える。他の性感染症は横ばいであるのに、梅毒は明らかに女性において減少している。
- ・全国的には、女性だけの減少はみられておらず、やはり20代の女性に多い傾向にある。専門家によると、SNSで知り合う機会が多くなったことや、一般に周知され、検査に行くようになったから増えたのではないかとされている。巷にはもっと感染者がいると推測され、検査数増加が報告数の増加の原因と分析している。
- ・男性は症状が出るから受診するが、岐阜県の状況は、女性では性風俗関係者と妊婦がほとんどであり、その数も減少しているということは、やはり女性における受診(検査)控えも考えられ、女性への啓発が必要であろうか。

○昨年と比較し増加がみられる腸管出血性大腸菌感染症、感染性胃腸炎の背景要因について

- ・ 昨年からコロナ禍の外出自粛などがあるが、今年は少し戻っていることが原因であろうか。食中毒など食品衛生の状況ではどうなのか。
- ・ 12月に胃腸炎は多く発生していたが、原因がわからない、どのような病原体によるものが流行しているのか。

【情報提供すべき事項】

○腸管出血性大腸菌や感染性胃腸炎の増加について

(委員より)

- ・ かわら版は誰に向けた情報か。
- ・ 胃腸炎についてノロウイルスを中心に情報提供すると、ノロウイルスが流行していると誤解されるのではないか。
- ・ 感染性胃腸炎は通年気をつけなければならない疾病であるが、夏と冬とでは中心となる病原体が異なるため、食品衛生とひとくくりにはいけないように思う。

(事務局より)

- ・ かわら版は保育園等に向けています。内容等については、検討して今後対応していきます。

○ダニ媒介感染症について

(委員より)

- ・ 県下で初めて日本紅斑熱の診断例があり、医療者向けに改めて日本紅斑熱、ツツガムシ病の状況などダニ媒介感染症について啓発すべきか。